

76

201-Tl-chlorideと子宮腫瘍スキャンニング  
 東邦大・放・ ○戸張千年、金海洋雄、黒沢 洋  
 同 産・ 室井克夫、渡辺 肇、野口昭二  
 都養育院・核 松井謙吾、飯尾正宏

201-Tl-chlorideは、現在心筋スキャンニングに広く用いられておりその臨床評価は非常に高い。一方Tlは、化学的性質としてⅢA族に属しており、また薬理学的に $K^+$ とanalogの関係に有る。従って、アルカリ金属としては従来のGa、CsやRbと同様に悪性腫瘍スキャンニングの成立が期待でき、また組織学的類似の子宮筋スキャンニングも推測出来る。今回我々は子宮悪性腫瘍を中心として子宮肥大例に201-Tl-chlorideを応用したところ再現性を有する満足できる結果を得たので種々の解析を試みた。

対象は、当院婦人科を受診した全54例である。

対象は、当院産婦人科で診断された子宮の良性悪性腫瘍例に施行した。方法は、前処置せず201-Tl-chloride 2mCiを静注し20分後にスキャンを施行した。その結果、子宮筋腫例では全例に陽性像を得られ、leiomyomaは充実性の辺縁の鮮明な像であり、Adenomyosisは均一の集積であるが、ややleiomyomaに比し集積が少なく不鮮明の像を得られ、それぞれ別のスキャン像から、ある程度の鑑別診断が可能であった。一方、悪性腫瘍例では、体部に全例陽性像を得られ、その像は筋腫とは異なる比較的irregularな集積を認めた。また頸部では5例中3例に陽性像が認められた。全例陽性像を得られない理由としては、201-Tl-chlorideの病巣の大きさがそのスキャン成功に関与しているものと考えられた。

以上の如く、現在の放射性医薬品が子宮組織を中心とする軟部臓器のスキャンに対して疑問であったが201-Tlを用いることによりある程度以上の大きさに発育した子宮軟部組織スキャンが可能であり、また臨床症状、その他の検査と合わせると鑑別の可能性が認められた。

77

健康人女子と子宮ガン患者の赤血球への $^{86}\text{Rb}$ のuptakeの比較  
 放医研 臨床研究部  
 ○山根昭子 福田信男 松本 徹

乳ガンおよび肺ガン患者赤血球の寿命が5年以上生存例については正常値をしめし、5年以内に死亡した例については短縮の傾向がみられたと、F・Bauerらは報告している(1967年)。この報告にもとづき乳ガンの患者の赤血球にin-vitroの条件でカリウムのトレーサーとして、 $^{42}\text{K}$ のかわりに半減期の長い $^{86}\text{Rb}$ を使って $^{86}\text{Rb}$  uptakeを測り、健康人に比較し乳ガン群では低値をしめしたことは15回核医学会で報告した。今回は、子宮ガン(38人)、子宮ガンで以前治療し退院後定期検診のため再来した定検群(14人)と健康人女子群(18人)の3群について $^{86}\text{Rb}$  uptakeの比較を行った。

その結果は乳ガンの場合と同様に、子宮ガン群は健康人女子群に比較し低値をしめした。定検群はさらに低値の傾向があった。

Kは受動輸送と能動輸送(ouabainでblock)があり、3つの群の $^{86}\text{Rb}$  uptakeをこの2つに分けると受動輸送の方に低下がみられ、能動輸送では有意の差はみられなかった。しかし実際には、後の2つの群ではouabainの阻害能力が健康人と異っている疑問もあり真の能動輸送の値であるとはつきりきめられない。

周知のように、細胞内外へのイオンの移動は種々の要素が密接に関連して行われていることから、 $^{86}\text{Rb}$  uptakeと同時に同じ血液で、コレステロール、カリウム( $^{39}\text{K}$ )、平均赤血球容積(MCV)、ヘマトクリット値などを測り、これらの値と加令と $^{86}\text{Rb}$  uptakeとの間で多変量解析を行った。

健康人女子群では、MCV、Hct、コレステロールの間で正の相関の傾向があり、加令との関係では負の相関の傾向がみられた。一方、子宮ガンおよび定検群では、何れとの間でも相関がみられなかった。つまり後の2群は生体内での環境の変化のためお互いの相関が非常にみだされている可能性が強い。私共はouabainの阻害能力の問題と合わせて、詳細を検討中である。